CELERY

No.23
1996

CAMPUS
COMMUNICATION

中村学園大学　中村学園短期大学／広報

クリスタルハーモニー定期演奏会から

MESSAGE

本学から巣立ち行く皆さんへ

新しい時代にマッチした知識や技術を積み重ねて行く努力を

学長　山元　寅男

本年、中村学園大学ならびに中村学園短期大学を卒業される皆さん、ご卒業誠におめでとうございます。また、大学院修士課程を修了され、修士の学位を得られました皆さん、おめでとうございます。

皆さんが本学で勉学された時期は、我が国の経済不況の真っただ中にありました。しかも、国内外の政治的、社会的な不安定の時期でもありました。この様な環境の中で、卒業後の就職や自らの目指す方向にも不安を感じながらの学生生活であったかも知れません。

しかし、皆さんは本学の建学の精神に支えられながら、充実した教育を受けられ、大学という学修の場で、知識と技術と豊かな人間性とを学び修得されました。このことは、いうまでもなく、皆さんが、これから出ていく社会の中で直面されるでありましょう幾多の難問題の解決に、自信と心の支えとを与えてくれるものと信じます。しかしながら、皆さんが本学在学中に修得された知識や技術は、膨大な知識技術体系のほんの一部にしか過ぎず、しかも、その基礎となるべきものであります。したがって、そのままでは、社会で存分に活躍するのには不十分であります。今後、実社会での経験を積み重ねながら、大学で得られた知識や技術を土台として、その上に、新しい時代にマッチした新しい知識や技術を、絶えず積み重ねて行く努力が必要であります。世の中の進歩が著しい今日、それぞれの専門分野の今の知識・技術は、時日が経つにつれ陳腐となり、絶えず新しいものが求められてきます。この意味においても、生涯学習の必要性は益々大きくなって参ります。生涯学習において、単に新しい知識や技術のみならず、これからの社会では、独創性と問題解決能力も求められております。このこともぜひ心に留め置いて欲しいと思います。

皆さんは、終戦五十年目の卒業生ということであります。現在、我が国は経済不況にあるとはいいながらも、日本の歴史の中では、恐らく繁栄の頂点にあるといっても良いでしょう。欲しいものは何でも手に入るし、グルメや飽食といった言葉は日常茶飯事に聞かれます。しかし、この繁栄は、戦後の廃虚と貧困の中から、日本国民が必死の努力と英知を傾けて築いてきたものであり、これから先何時まで続くかは判らない、不透明な時期に来ていることも十分認識しておいて欲しいと思います。戦後の日本国民が持っていたハングリー精神をもう一度検証され、これからの日本の行方をグローバルな視点から問いかけ、今後の日本社会の在り方を真剣に考えて欲しいと思います。現在の繁栄の中に埋没して、無為徒食に終わること無く、日本の将来を背負って行く気概を持って下さい。

皆さんは本学在学中、多くの人との出会いがありました。先生、学友、実習先での先生と幼児や学童の皆さん、その他、数え切れないほどの人々との出会い、その一つひとつの思い出や感動が走馬灯のように頭の中を駆け巡っていることでしょう。この出会いにより、知らず知らずの内に、多くのことを学ばれたことと思います。特に、心の暖かさ、広さ、他人への思いやりといった人間としての心を、これらの出会いによって培って来られたと思います。これらは皆さんが社会で生きていく上に、何物にも代え難い宝物でしょう。これからも、また、新しい出会いがあることと思います。この出会いを大切にして、暖かい社会を作り意義ある人生を送って下さい。

終わりに、これから厳しい社会に船出をされるわけですが、素晴らしい先輩の後に続き、学園祖中村ハル先生の「努力の上に花が咲く」というご遺訓を忘れることなく、如何なる荒波にも負けずに乗り越えて、より良い社会のために頑張って下さい。ご健勝とご活躍を祈念しております。

卒業生から

楽しく学び研究できた

―私の大学院生活―

大学院・栄養科学研究科　栄養科学専攻

富安　俊子

ほんの少し前、雨の降る日に入学したと思ったら、もう卒業です。学んだことがたくさんあった二年間でした。

少しだけ、私の同級生の紹介をしたいと思います。大学院生十人中、他の大学から七人、そして、その中の三人は社会人からの入学。経歴様々、個性も様々ですが、これほど大学院の歴史に残る人が集まっている学年も珍しいのではないかと思います。私にとっては、楽しいことばかりあった学生生活だった気がします。これから一生付き合って行けそうな友人ができたこと、そして、素晴らしい先生方に巡り会えたことは、これからの私の大きな財産です。研究のことだけでなく、学んだことは、言葉で言い表せないくらい大きいものがあります。

私の研究についてお話ししたいと思います。私の研究テーマは「低マグネシウム血症ラットにおける心室性不整脈の易誘発性」で、そのため、ラットの大腿動静脈にチューブを挿入する練習から始めましたが、それがとても難しく、修得に一年近くかかりました。研究が間に合うのかどうか、不安に陥ったことは一度や二度ではありません。その度にみんなに迷惑をかけてしまいました。いままで社会人として看護職に携わっていたのですが、動物と人とは違っていました。当たり前のことですが、驚くことの連続でした。実験室でラットを逃がしたり、噛みつかれたり。しかし、動物実験は、前準備、前実験がとても重要だということ、前実験をきちんと行っていれば、本実験がスムーズに行えるということを身を持って知りましたが、研究成果を論文にまとめるには、二年ではあまりに短すぎました。

この先、看護大学で教育に携わる私としては、ここで学んだことを生かして先生方から学んだことを生かしていかなければなりません。卒業しても、困ったことがあれば頼ってしまうかも知れません。その時はどうぞよろしくお願いします。

今後、修士課程への進学を希望している学生の皆さんへ。大学院はとても楽しく勉強や研究のできるところです。私の後輩になりませんか。

△大学院の同級生と（前列中央が筆者）

患者さん本位のケアに努めたい

―私の栄養士像―

大学・食物栄養学科　管理栄養士専攻

宮本　徳子

〝栄養士になる！！〟そう期待を胸に入学した私が、早くも卒業式を迎えることとなりました。高校時代に、ひょんな事から「管理栄養士」に惹かれ本学を受験することになったのですが、正直いってどんな職業なのかも良く知りませんでした。当時の私は、「大学生」という響きだけに憧れていました。入学してみると大学の講義も新鮮でしたが、サークルやバイトの方に、さらに熱が入った気がします。どちらかというと、わが大学はこじんまりとしており、講義や実験・実習が多いので、何もしなくても時は過ぎていくといった感じでした。

そして、気がつけば三年生です。少しは就職を気にするようになりました。しかし、入学当時と同様に私の栄養士像はまだ、明確には描く事ができませんでした。それどころかマイナスイメージばかりが浮かび、自分の将来と照らし合わせることができませんでした。将来の夢が現実に近づいていくほど不安に感じ、自分の無限の可能性みたいなものが一瞬にして消え去った気がしたこともありました。

しかし、この頃から私の意識改革は始まりました。何事にも柔軟に前向きに取り組んで、自分のものにしていく心構えが大切だと思うようになりました。興味のある事はもちろん、多くの社会に触れて視野を広げる事は何らかの形で自分の可能性を広げる事も実感できるようになりました。

卒業を間近に控えた今は、栄養士は人と接する事ができ、やりがいがあると感じ、その目標に向けて、ただがむしゃらに頑張っています。栄養士は保守的に思われがちですが、私自身は、型にはまらない患者さん本位のケアを努めたいと思っています。本当の意味でこれからが、私にとってのスタートです。ひと回りもふた回りも成長して、また就職以外でも多くの夢を持つことでいつも輝いていたいです。

振り返れば、悩んだり、回り道をした事も決して無駄ではなく自分の転期になった気がします。これだけでも私にとって意味ある学生生活だったと思っています。

△ゼミのみなさんと（前列左端が筆者）

好きこそものの上手なれ

―卒論はシンセサイザーを使って―

大学・児童学科　児童教育学専攻　大野　哲義

私は卒業論文の作成に当たり、三好教授のゼミナールで『シンセサイザーの一般化とその活用』というテーマで研究を進めていきました。

入学して間もないころから、大学では十数年来興味のあったシンセサイザーを、本格的にやろうと思っていました。

シンセサイザーといえば、いうまでもなく今世紀にできた、まだ歴史の浅い楽器です。楽器ということだけでなく工業製品という一面も持っていますが、その種類は多岐にわたっており、半年サイクルで新技術が登場しているといっても過言ではありません。卒論では、そのどこまでを展開させるか、また、音楽という要素だけでなく、音ができるまでの物理的なものや、フローチャートといったものも必要で、三好先生のご指導の下、難しいことをいかにわかりやすく展開していくか、ということが最大のテーマでもありました。

根っからの音楽大好き人間でしたが、実は、入学して「器楽」の講義を受けるまではキチンとした形でピアノを弾いたこともなく、毎週の課題には悪戦苦闘の日々を送っていました。しかし、小学校教育実習では査定授業を「音楽」でやりましたし、今では作曲が趣味の一つにもなりました。

『好きこそ物の上手なれ』という言葉があります（私は決してうまくはないのですが）。本当に自分がやりたいことに、このかけがえのない学生生活の日々を生かしていく、これは単純なことのようですが、本当に大切なことではないかと四年間を通じて、そして、卒業論文の作成を通じて改めて感じました。

中村学園短期大学での二年間、「これだけは自慢できる」という事が一つだけあります。それは片道二時間の通学。これだけでは「どこが自慢なの？」と思う人が多いでしょう。

私は弓道部に所属していました。毎日行っていたわけではありませんが、練習をして帰ると、家に着くのが夜の九時、十時は当たり前でした。そして土、日はアルバイトです。とてもハードな毎日でしたが、私は部活動もアルバイトも大好きでした。

△成人の日、三十三間堂大的全国大会（京都）にて

二年前、本学に入学した時、部活動に入る気なんてこれっぽっちもありませんでした。しかし、高校の頃から続けている弓道に未練があり、他の部員よりも少し遅い時期に入部しました。そして、私は感動したのです。そこには「自由」がありました。自分勝手にふるまえる「自由」ではなく、自分たちで決めて、自分たちで行動して、そして自分たちで責任をとる「自由」です。学校におんぶにだっこの高校時代とは違う、短大生としての生活を肌で感じることができたのは、部活動に入っていたおかげだと思います。

部活動は遠征も多く、何かと出費が多いので、私は一年生の夏休みからアルバイトを始めました。地元のホテルでの宴会サービス係です。このアルバイトを通じて、視野が広がったように思います。そして何よりも、働くことのすばらしさを学びました。初めて仕事をまかされた時の喜び、やり遂げた時の充実感は、今でも覚えています。就職のため、バイトができるのもあと二カ月程です。

後輩の皆さんにわかってほしいことは、大学時代でしかできないことが、たくさん周りに転がっている、ということです。大学生活、特に短大は、すぐに終わってしまいます。充実した毎日を過ごすため、もう一度自分の周りをゆっくり見渡してみて下さい。

「忙しい＝充実」した毎日

―クラブ活動を通じて得た自由と責任―

短期大学・食物栄養科　久保田　幸恵

卒業生から

有意義な学生生活を終えて

―就職活動を通じて成長―

短期大学・家政科　井上　富美子

私は、この中村学園にある一つの目標を持って入学しました。それは、よい成績で自分の条件にあった会社に、学校推薦で就職するということでした。

そのために、就職に有利なワープロ、簿記、秘書検定の資格を、一年という短い期間で取得することと、すべての講義を休まず真面目に取り組むことを実行しました。

家政科で様々な勉強をしていくうちに、自分の知らない分野にも興味がわき、何事にも挑戦しようという向上心が生まれてきました。その結果、就職のためだけでなく、いろんな意味で自分の将来にプラスになる考えを持つことができるようになりました。

いよいよ、就職活動に入ると、就職セミナーには必ず参加しました。そして、就職指導の先生方や先輩方のアドバイスを受け、企業研究と自己分析を重ねたことで、一番就職したい会社を見つけることができました。ところが、現在の就職環境は、超氷河期とも言われる厳しいものです。果たして自分の実力だけで思い通りの会社に入れるだろうかと、たいへん不安でした。

しかし、どうしてもその会社に入りたいという願望があったので「目標を達成するために出来る限りの努力をして頑張ってきたんだ」という自信と、自分らしさを持って就職試験に臨みました。

そのおかげで、第一志望の会社から内定をもらうことができました。この時は、本当に努力の甲斐があったという喜びと、満足感でいっぱいになりました。この事は、これから社会人になる私にとって、大きな励みになると思います。

ほんとうの第一志望

―挫折感を乗り越えて―

短期大学・幼児教育科　小谷　友枝

二年前の入学式、これからの学生生活に、夢と希望いっぱいの友人たちとは対照的な私でした。というのも、私は第一志望の国立大学に失敗したからです。そのショックは大変なもので、これまでにない挫折感でした。しかし本学への入学は、私の進路に大きな影響を与える節目となりました。

学校が始まって、日一日と講義が進むにつれて、保育者となるための有意義な教科が多く、本学の良さがわかってきました。そして、この短大に学んで本当によかったと思えるようになってきました。短大生活では、素晴らしい友人との出会い、親しい友人との励まし合いの中で、保育者になりたいという目指すべき目標が見えてきました。

△幼稚園実習にて

先生方の熱心なご指導のもと、専門的な知識・技術を身に付け、学外実習に臨むことができました。実習を積み重ねていく中で、つらいことや落ち込むこともありましたが、子ども達の限りない可能性や多くの笑顔を見ることによって励まされ、子ども達の将来を自分の力で生かしていくことに喜びを感じるようになりました。そういった喜びも、ここで学んだからこそ経験することができたと思います。私は保育者というやりがいのある道を選んで、本当によかったと思います。

就職活動においても、積極的に活動し、「努力の上に花が咲く」という学園祖、中村ハル先生のご遺訓を実践してきたことが、就職内定の喜びへとつながりました。

最後に、本学在学中は、先生をはじめ、友達、実習先の先生方、そして両親にたいへんお世話になりました。このような人々への感謝の気持ちを忘れることなくこれからも保育者として、一生懸命努力していきたいと思います。

上海中医薬大学と学術交流協定を締結

―「薬膳に関する研究」を通して個性的特色ある教育研究の推進を期待―

学長　山元寅男

現在、わが国の高等教育は、明治の学制発布と第二次世界大戦終結後の教育大改革に次ぐ、第三番目とも言われている大改革の最中にあります。

それは、文部省の大学審議会による「我が国の高等教育の在り方」についての答申に基づいております。答申の基本は、高等教育における教育研究の高度化　個性化　国際化を三本の柱として、高等教育の改革を進めることとし、これにより、文部省は、「大学設置基準の改正」を平成三年に行いました。

本学では、これらの答申や設置基準の改正に呼応して改革を進めているところでありますが、本学の個性化・国際化の一環として、「薬膳」に関する教育研究をとりあげてはどうかとの理事長の示唆を受けました。このことに関連して、約三年ほど前から、国際交流協力委員会代表の北岡豊治氏から、中村久雄前理事長に対しまして、中国の中医薬大学との学術交流を提言されておりました。本学としましても、教育研究活性化のために、この協力関係を推進することとしました。

北岡氏の紹介される上海中医薬大学と手紙による交渉を何回か重ねた後、理事長と協議の結果、上海中医薬大学と本学との学術交流実施の可能性について予備交渉のため、平成六年十二月九日、私と三成由美講師が上海中医薬大学を訪問しました。ここでの会談の席には、施杞学長をはじめ、薬膳研究室主任の汪宗■教授他三名の教職員の方々が出席されました。この席で、薬膳研究室の汪教授からは、本学で薬膳の教育研究を行うに際しての貴重なアドバイスを頂きました。協議の後は、附属病院を案内して頂き、特に、薬膳による糖尿病の治療の状況を病室で見学し、患者さんからのお話も直接聞くことができ、薬膳の意義について十分に認識できました。また病院の主任栄養士の案内で調理場の実際についてお話も聞くことができました。午前中の協議と病院の見学等から、本学と上海中医薬大学との薬膳を中心とした学術交流は可能と判断した次第です。

病院見学後、再び会議室で、上海中医薬大学側の要望である中国伝統医学研究への西洋医学的研究法の導入に協力することに同意し両大学間で学術交流を行うことについての「覚え書」を中国側が作製し、翌日オリンピックホテルで調印しました。

この覚え書では、学術交流の具体的事項については後日取り決めることになっていましたので、帰国後、その具体化をはかるために学術交流協定書の草案執筆にとりかかりました。協定の主旨は、日中両国民の友好親善と相互理解の促進及び学術交流の進展を基本とし、両大学間で中国伝統医学と西洋医学の融合のための教育研究の協力を行うこととし、そのために両大学間で研究者、学生の交流を行うというものであります。この草案について上海中医薬大学と協議しました結果、最終案に同意が得られましたので、本学の国際交流委員会、並びに、教授会の承認を得まして、平成七年十一月十四日、上海中医薬大学施杞学長一行の訪日時、西鉄グランドホテルにおいて「中村学園大学と上海中医薬大学間の学術交流協定書」に調印、両大学間の学術交流が正式に発足することになりました。

今後、本学の個性的特色ある教育研究を推進するためにも、「薬膳に関する教育研究」をその一つとし、「薬膳研究室」を本学は設置するために、本学の教員を上海に送り、本格的研究を開始したいと願っております。

一方、上海中医薬大学からの研究者も本学に受け入れ、協定の実施が活発化するに伴い、大きな成果が期待できると考えています。

△協定書を交換し、握手される施杞学長(左)と山元寅男学長(右)

学内ネットワーク環境を整備

―インターネット利用も実現させ情報環境の充実をはかる―

情報処理センター長　島内博行

本学では、平成八年四月から、全学情報ネットワーク（学内LAN）の構築とインターネットの利用の実現に向けて、計画を進行中です。学内LANは、ATMと呼ばれる最新の情報伝送・交換技術と、学内に網羅される光ファイバーを幹線とする各種ケーブルによる高速伝送路により、ネットワークを構成します。更に、各研究室をはじめ演習室等に、情報コンセントと呼ばれる学内LANへの入口となる端子を設置します。これにパソコンを接続することにより、マルチメディア情報をはじめとするあらゆる情報を、10Mbpsのという高速で学内LANに接続されている他のコンピュータとの間で、やりとりする事が可能になります。例えば、電子メールや図書館情報の検索などがあげられます。

次に、インターネットの利用についてですが、これを実現するためにまず、ドメイン名とIPアドレスをJPNICという組織から取得します。これは、世界の中で本学を識別するためのもので、本学のドメイン名は「NAKAMURA-U.AC.JP」です。更に、九州大学にあるKARRN（九州地域研究ネットワーク）のNOC（ネットワークオペレーションセンター）と本学のLANを、192Kbpsの転送速度の高速デジタル回線（専用回線）で接続し、各ネットワーク間での設定・登録等が終了して、はじめてインターネットが利用できるようになります。

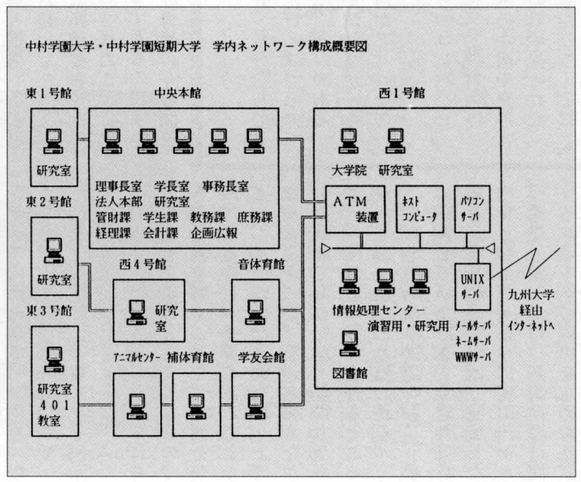
本学では、学内LANを経由してインターネットを利用することになりますので、ほとんどのユーザーが、自分の部屋から世界中のインターネットに接続されているコンピュータとの間で、情報交換が可能な環境が出来あがることになります。

インターネットやWWW（ワールド・ワイド・ウェーブ）というホームページを開設する際に使われる最も基本的な言語は、最近ではいろいろなメディアにより紹介されていますので、関心を持たれている方も多いと思いますが、本学でももうすぐこれらを体験し、活用できるようになります。

また、情報処理センターでは、汎用コンピュータ及びパーソナルコンピュータシステムも、ネットワークやマルチメディアなどの最新機能を搭載した機器に更新します。

以上のように、平成八年度は中村学園大学・短期大学にとって、情報化元年といってもよいくらい大規模な情報環境の整備が行われます。

今後、ますます発展していく情報化社会で、高度化、学際化が進む各研究分野及び教育等において、本学の情報環境を充分に活用していただくことを期待しています。



子どもの心（20）

児童学科・幼児教育科
助教授　田中浩子

このところ毎年、学生に「私からみた現代の子どもの姿」というテーマで、今の子どもの印象を書かせている。それをみると学生自身、つい10年ほど前まで”子ども”であったはずなのに、自分のときに比べて変わったと指摘するのがほとんどであり、帰宅後の学習と遊びの変化をあげるものが特に多い。これは、学生の印象に留まらず、多くの調査が同様の結果を示し、現代の子ども達の特徴として論じられている。

帰宅後の学習に学習塾の存在は大きく、そこに通う子どもは放課後の自由な時間を失い、他の子どもは遊び相手を失うことになる。

遊ぶ仲間の小規模化は遊ぶ内容を貧弱なものとしていくが、現代の遊びは!室内で"ひとりきりで#体を動かさずに$商品化されたものを相手に%受け身の形ですごす「孤立型」の性格を強めていると言われている。仲間の存在をさほど必要とすることなく、予どもを楽しませてくれる対象があるのである。しかし、これは多くの大人の自由時間の過ごし方でもある。

テレビゲーム、メディアとしてのテレビとマンガは、子どもの遊びを一変させた。従来からの戸外での子ども同士の遊びが、子ども時代を特徴づけるとともに、さまざまな発達課題を達成してきたことを考えると、単なる予どもの遊びとして見過ごせないものである。

平成7年、文部省は保健室でのカウンセリング機能を向上させるため「相談活動の手引き」を作成し、全国の学校に配付している。

予どものこころの問題は学校教育の緊急課題ともなっている。

平成5年度の小学校の不登校児は1万人を越え、中学生は5万人に届こうとしている。深刻な現実である。

国際親善・料理交歓会

食を通して他国の文化

留学生との「第二十四回国際親善・料理交歓会」が昨年十月二十九日、本学の調理教室で開かれた。

この交歓会は、太宰府天満宮崇敬会国際婦人部と九州大学留学生会の主催によるものである。

昭和五十一年度、第七回目から本学が会場となり、今年度で二十回目を迎えるが、本学学生も数多く参加、協力している。

当日は朝八時三十分から調理がスタートすると、美しい民族衣装を身につけた留学生も、コック長に早変わりする。婦人部、九大の学生、本学の学生も加わり世界の珍味、特産物が手際よく調理され、一時間も経過すると母国語も飛び交い、調理室は香辛料の香りと熱気で充満する。各調理台は、まるでお国自慢の屋台そのものである。できあがった各国の料理は審査され、乾杯音頭の後、好みのお酒を片手にいよいよ世界のグルメに舌づつみが打てる。

この交歓会は、本学の学生にとって、異郷で勉学に励む留学生との出会いの場であり、〝世界は一つ〟、食を通して他国の文化を知り、心の交流を深めるまたとない場所でもある。

平成八年度は、十月二十日に予定されている。

（文責／家政科・三成　由美）

本学から巣立ち行く皆さんへ

児童学科講演会

「己の修養から」

平成八年二月九日、児童学科主催の講演会が開催された。この講演会は、各界で活躍中の著名人を招聘し、主に児童学科三年次の学生を対象として行われる。学生諸君が平常の学修の成果をふまえてさらに幅広い知識を修得し、教養を高めることを目的として、毎年この時期に実施されているものである。

今年度は、教育現場の教師等の指導で全国的に活躍されている、京都大学高等教育教授システム開発センターの梶田叡一教授に「子どもの内面の理解と指導」と題して、学術講演をお願いした。

平成元年に学習指導要領や幼稚園教育要領が改正されたことに伴い、「個性豊かな子どもの育成を目指す」ことが教育界の今日的課題となっていることもあってか、学生の反応が大きく、四年次生や食物栄養系の学生も交え、三百人収容の大講義室が満席になるほどの盛況であった。

講演の中で、梶田氏はまず、オウム真理教事件に象徴される知識偏重の罪を取り上げ、これまでの学力観や指導の在り方の問題点を論理的に指摘し、子どもの指導にあたっては社会化を図るとともに子どもの内面を理解し、内面の豊かさを育成することの大切さや、そのことの実際上の難しさを例示しながら説かれた。

加えて、指導者自らも自分自身の内面を正確にとらえることのできる力量を磨くことや、内面を豊かにする修行が必要であることなどを、多面にわたる例を取り上げながら説かれた。笑いを交えながらの講演であったが、説得力があり、学生諸君は啓発されるところが多々あったことと思われる。

また学生からの質疑にも、丁寧に応答していただき、予定の二時間をかなり超過したが、充実した内容となった。さらに梶田氏から受講生に対しては、講義内容に関するレポートの提出を求められ、今までとは違った講演会でもあった。

（文責／児童学科・岡本　健二）

「健康・栄養クリニック」

第三期終了

―肥満者の減量に成果―

健康増進センター（センター長中村元臣教授）により、昨年の九月から開催されていた「健康・栄養クリニック」（第三期）が、一月二十日に終了した。

このクリニックの目的である肥満者の減量と健康管理については、受講者十九名（男性五名）の内十六名に体重の減少が見られ、約一〇キロ減量した人も二名おられた。

また、体重の減少だけでなく、体脂肪の減少、コレステロールの低下、耐糖能の改善が見られ、健康管理の面においても大いに成果があった。

参加者からの感想として、「減量について、これまで本やテレビで見てもわからなかった理論的な面からも理解することが出来てよかった」「何よりも病院や他の個所で受けることの出来なかった個人個人の指導が大変良かった」、また「費用も、十回の食事指導・運動処方のクリニックと、血液検査、体脂肪、腹部脂肪量測定、体力、基礎代謝測定の検査など、内容が充実している割に安い料金で地域の人々に還元して頂いている」と、感謝されていた。

このクリニックでは、受講期間中の減量だけでなく、終了後の減量の長期間維持と体重の反動増量（リバウンド）を防ぐことにも取り組んでいる。このため、四ヵ月後、八ヵ月後のフォローアップも用意されている。更に、一昨年九月の第一期受講者の、一年後のフォローアップも行なわれたが、リバウンドもなく、十九名全員に減量の効果が続いていることが確認された。

最後に、受講者の食生活で一番に挙げられるのは、男性は、お酒の量を半分にすること、女性は、間食を減らすことであり、バランスの良い食事のとり方を知ることが減量の第一歩である。

■元気なサークル(15)　クリスタルハーモニー

大学　児童教育学専攻
三年　福岡　弘江

女性合唱団という仮面の下は、ダンスあり、コンパあり、笑いありという今どきのサークルです。歌うことが大好きな人の集まりですから、ストレス発散にもってこいです。

主な活動は、年に二度開かれる定期演奏会のための練習。自分たちで、歌ばかりではなく、ミュージカル風にセリフやダンスも考えます。皆さんご存じの「天使にラブソングを」の映画をアレンジした昨年の企画ステージは、お客さまにも大好評。自分たちでステージを創り上げるプロセスは、楽しく厳しく、深みのあるものです。本気で情熱をかけられる、最高の場所がクリハなのです。

また、他大学とのコンパやピクニックは、新しい出会いのチャンス!! 恒例の合宿や夏の旅行では、先輩の日頃見られない一面を発見できたり……とにかく楽しいことがいっぱいのサークルです。二十八年の歴史と伝統を基盤に多くの(!?)ファンの方々に支えられ、今日もクリハに集います。

今しかできない経験をしてみませんか？　最高の充実感と達成感が味わえることでしょう。部員一同自信をもってお薦めします。

△　昨年12月に行われた定期演奏会

クリスタルハーモニー

部　長　福岡　弘江
指導者　村山　　暁　先生
顧　問　青木　英実　助教授
部員数　29名

中村学園女子高校 バスケットボール部 '95 WINTER CUP 優勝

―4年ぶり2度目―

△　樟蔭東との熱戦。（グリーンのユニフォームが中村学園女子）

バスケットボールの第二十六回全国高校選抜優勝大会の決勝が、十二月二十八日、東京代々木第二体育館で行われ、中村学園女子高校が樟蔭東高校（大阪）を破り、四年ぶり二度目の優勝を飾った。

試合開始直後から中村学園女子高校は、樟蔭東と接戦を展開し、同点で折り返した後半、一時リードを許したが、残り二分に逆転しそのまま逃げきった。

平成７年度

科学研究補助金対象研究の目的と内容

（上）

科学研究費は、わが国の学術の振興のために、優れた学術研究を格段に発展させることを目的に、文部省が公募する研究助成費である。研究者が計画する基礎的研究のうち、学術の動向に即して、特に重要なものを取り上げ、高度の研究成果や独創的・先駆的研究を特段に推進する観点を重視して、助成されている。平成7年度に助成された7件のうち今号で、食物・家政系の4件、次号で、児童系の3件を紹介する。

肝酵素誘導あるいは阻害作用を示す食品成分の検索とその安全性評価（一般研究Ｃ）

食物栄養学科・食物栄養科
教　授　吉村　英敏（代表者）

食品中には、栄養素以外に種々の有機化合物が含まれている。これらの中には、例えば血清コレステロールの低下作用をもっといわれる大豆ステロールや食物繊維をはじめ、種々の生体調節機能を有するものが知られ、食品の第三次機能として注目されている。

一方、食品中には、脂溶性化合物の代謝に関与する酵素、例えば主として肝ミクロゾームに局在するチトクロムP-450などを誘導し、あるいは阻害する成分も少なからず存在する。このような食品成分は、P-450活性の変動を介して生体に影響を及ぼすことになるが、間接的作用であるため前記の直接作用のように明確には認知されにくい。

しかし、このP-450の誘導により、体内のビタミンAやステロイドホルモン、あるいは服用した医薬品などの代謝分解が促進されるような有害作用、また逆に、化学発がん剤の作用が抑制されるような有用作用の例も報告されている。このように、P-450という酵素は、脂溶性化合物の酸化に関与し、これらを水溶性にして速やかに体外に排泄させる機能を介して、化学物質の解毒あるいは活性化に関わっている。

それだけに、P-450の量や活性を変動させ得る成分が食品中に存在すれば、その成分の含量と作用の強さによっては、栄養学的、生理学的面で、生体に種々の間接的影響を及ぼすことが予想される。

本研究は、このような事情を背景に、日常的に摂取している嗜好品、野菜、あるいは果物などの中に、前記のような機能性化合物の存在の有無を明らかにし、それに対する適切な対応を確立することを目的として企画された。その遂行のため、今回まずお茶類を取り上げ、P-450系に及ぼす影響を明らかにして、この分野の研究モデルとしての位置付けを確立したい。

小中学校生徒における成人病予防のための集団力学的栄養指導の方法と効果に関する研究（一般研究Ｃ）

食物栄養学科・食物栄養科
助教授　林　辰美（代表者）

我が国における小児期からの成人病問題は昭和五十年代後半頃から顕在化し、小児成人病の発症とその予防は、今日、学校保健上の大きな課題となっている。

健康管理には適切な知識及びこれと対応した食習慣が必要であることは言うまでもない。そのためには、小児期からの成人病予防対策を低年齢段階から、できれば学校教育のなかで実施することが望ましい。例えば、アメリカでは栄養士が中心となって「フード・ピラミッド」と呼ばれる教材を開発する等、研究は盛んである。これらを参考に、我が国の実情に合った栄養成分表示や栄養教育の方法を見出すことは、小児成人病克服のための緊急課題である。

当研究は、以上の問題認識に立って、小・中学校の児童・生徒を対象とする健康教育システムを開発しようと試みるものである。すなわち、従来の栄養指導は個人教育型の改善法であったが、集団力学の理論を導入する一方で、視聴覚メディアを用いて、自分の栄養状況を認知し、改善の目標を与えて努力を引き出す方法を試みた。まず、栄養教育教材の開発は知識偏重にならないよう配慮し、学齢の発達段階に応じた適切な栄養摂取のモデルを、日常的食生活に基づいて作成し、これをパソコンにインプットした。（各クライアントは自分の食事と比較して栄養の適正度を判断し、改善のポイントを知るわけである。）

次に、食生活の改善は、K・レヴィンの「態度変容」の実験に準拠して、集団的意志決定の有用性を活用したものである。これら二つの方法の組み合わせにより、小児成人病予防並びに改善のためのカリキュラムの開発を目的とした研究である。

細胞外のイオン環境変化が血管の反応性と細胞内カルシウム動態に及ぼす影響

マグネシウムとカルシウムについての検討（一般研究Ｃ）

食物栄養学科・食物栄養科
講　師　阿部　志麿子（代表者）

マグネシウムは、生体内の生理的カルシウム拮抗薬と言われており、種々の生理作用においてカルシウムの作用と拮抗している。マグネシウム欠乏状態は、神経末端からのカテコールアミンなどの神経伝達物質の放出を促し末梢血管の収縮を引き起こしたり、直接血管の緊張度を高めるため、高血圧、虚血性心疾患及び脳血管障害の発症をもたらす危険因子の一つと考えられている。また、血管の収縮・弛緩の調節は細胞内カルシウム濃度変化によって制御されているため、マグネシウム欠乏により引き起こされる血管反応性亢進の一因は、この細胞内カルシウム濃度調節機序の異常によるものと考えられる。他方、従来よりマグネシウムの投与が血管弛緩作用や抗不整脈作用を示すことは臨床の場で経験的に知られているが、その作用機序については未だに明らかにされていない。

本研究では、細胞外のイオン環境変化が血管の収縮能や細胞内カルシウム動態に与える影響を、特にマグネシウムとカルシウムに焦点を絞り、明らかにすることを目的としている。細胞外のミネラルイオン濃度は食物摂取の影響を受けるが、近年、我国では緑黄色野菜などの摂取量が減少し、マグネシウムの摂取不足が指摘されている。また、高齢化社会に伴い高血圧を始めとした心血管系疾患の増加も予想される。これら疾患の予防や治療に関連した本研究の栄養学的立場からの取り組みは、社会的意義が大きいものと思われる。

在宅要介護高齢者の給食サービスシステムとヘルパー教育に関する評価（一般研究Ｃ）

家政科　講　師
三成　由美（代表者）

高齢化社会から高齢社会へ移りわが国の高齢者は、社会、経済的自立能力の低下、他の世代との価値観の相違身体諸機能の減衰、そして配偶者の死別による孤独感の増大など、いろいろなハンディキャップを抱えている。

高齢者は、自分自身の食事をある程度自分の好みで調達するという食事の自立が理想である。しかし、現実は厳しく、このような高齢者に対して、食事の支援ができる社会システムを設けることが必要である。現在、高齢者への給食サービスはさまざまなシステムで実施されている。

福岡市においても平成二年九月に福岡市市民福祉サービス公社が設立され、ホームヘルプ協力員の研修が開始され、養成されたホームヘルプ協力員は、在宅の要介護高齢者を対象に炊事を含む家事援助や身体介護サービス事業を開始している。また一方では、周二回モデル地区において、地域ボランティアの協力を得て、給食の配給サービスが実施されている。

食品には生命維持のための栄養機能、そしてさまざまな生態感覚をもたらす味覚機能、そして疾病予防や生体リズム調整などの体調調節機能があるといわれている。給食サービス事業はこのような機能を維持しながら、精神的な豊かさを満たし、人としてのコミュニケーションを改善するなどの側面が必要であり、特に食を介してＱＯＬ（Quality of Life）を高めることも重要である。そこで、現在の給食事業システムの問題点と対応を明らかにすることを目的に本研究を計画した。

高齢者の食事ニーズに対応できる給食サービスシステムを確立するためには、高齢者サービスの直接の担い手である、ホームヘルプ協力員への研修プログラムが重要である。そこで、これまで実施してきた食事介護研修プログラムの評価を行った。

健康生活のススメ（21）

食物栄養学科・食物栄養科
助教授　原　孝之

私は自分の建康の事を語るほど摂生に心かけているわけでもないが、おかげで厄年をクリアーして43歳になる。

厄年とは、男性では25歳・42歳・60歳、女性では19歳・33歳といわれている。これは宮からの陰陽道の教えによるもので、厄年には大病を患うという。この厄年が、実は本学の女予学生の皆さんの１～2年生にも当てはまるとは意外である。

ところで学生の皆さんは健康的な生活をおくり、大病をし友人はいないでしょうね。健康とは世界保健機構（WHO）の定義を引用するまでもなく、我々一人ひとりが身体的にも精神的にも社会的にも良好であることをいう。皆さんがこの定義のように健康に学生生活を過ごしているかは、本学での学生生活が勉学に限らず、すべてにおいて精神的に満たされているかにかかっているように思う。この飽食・物余りのせいだくになった世の中、学生時代にしか味わえない精神的な満足感を、一つでも多く体験してほしいと思う。

元来、大学の教員は、金もうけの世界とは遠くかけ離れたところで生きている。しかし、自分自信の好きな研究に打ち込み、それが成就したときの喜びは金には換えられない幸福感・満足感がある。そのような人たちとの皆さんの出会いが、将来の生きたに参考になればと思う。

現在、日本の大学・短大も、皆さんが勉学その他すべての活動に満足できるように自己改革中であり、本学も真剣に取り組んでいることを理解してただきだい。

記念誌と財津和夫氏作詞・作曲のキャンパスソングを予定

―大学開学30周年記念―

昭和四十年に開学した中村学園大学は、平成七年をもってちょうど三十周年を迎え、これを記念して、中村学園大学三十周年記念誌と、キャンパスソングがつくられている。

記念誌は、「序」「キャンパスこの十年」「キャンパス・ナウ」「キャンパス・ライフ」の四部で構成。なかでも「キャンパス・ライフ」には、中村学園大学の定点観測として行った学生生活に関するアンケート調査の結果が報告されている点がユニークで、現代の学生の生活ぶりや考えを示す興味深い資料となっている。このアンケートは、今後、一定期間ごとに実施することが検討されている。

また、本学にはこれまで「中村学園の歌」しかなかった。しかも、メロディーが女性的で、男子には馴染みにくい曲であったことから、男女を問わず口ずさめるキャンパス・ソングが欲しいとの中村理事長の考えで、福岡出身の著名なミュージシャンである財津和夫氏に打診したところ、快くお引き受けいただいた。

財津氏は、多忙な日程を割いて一月二十九日に本学を訪問。喫茶室で学生の代表七名と懇談されたが、曲作りの参考にしようと、学生生活の様子や大学のイメージなど、緊張気味の学生たちを丁寧にリードしながら、メモを取っておられた。

こうして大変な熱意で当たっていただいているキャンパス・ソングは、三月中に完成予定である。

△　喫茶室で学生と懇談中の財津和夫氏

食物栄養学科学術講演会

――転換期を迎えた病院食

△　立川倶子氏

一月八日、西一号館大講義室において、食物栄養学科主催の学術講演会が開催された。

講師は、社団法人鹿児島県栄養士会会長、全国病院栄養士協議会会長の立川県子氏で、演題は「転換期を迎えた病院食」。

会場は、補助椅子を準備するほどの人で満員となった。

講演で立川氏は、まず二つのことを説明された。

ひとつは昭和二十三年、連合軍の要請で実施された病院食が、二十五年の完全給食制度を経て、三十五年には基準給食制度に変わり更に食事療養制度へと、四十五年の歳月をかけて集団給食的食事から個別対応栄養管理へと大きな転換期を迎えるに至った経緯。二つめは、いま取り組まなければならない「特別管理加算の完全実施への努力」と「外来・入院・在宅栄養食事指導について」、更に「院外調理の規制緩和への対応」等について、豊富な資料を中心に病院栄養士の最前線にいて感じる熱い思いを語られた。

なかでも、「平成四年四月に新設された特別管理加算は、常勤の管理栄養士の配置と適時・適温配膳が条件とされており、管理栄養士の専門性が認められたと評価されるものである。しかし、一年後の実施率は一四・五％と低く、栄養士のひたむきな努力を期待する」という説明は、多くの学生の心を動かし魅了した。

また、今回新設された「入院栄養食事指導料」は、管理栄養士による栄養食事指導が評価されたものであること。病院の食事は、最も効果的な栄養食事指導の教育媒体となるものであるから、おいしい料理、献立が作成できなくてはその任を全うできないことが、先生の長年の豊富な体験を交えて力強く伝えられた。

立川氏は最後に、先輩栄養士が長年にわたって築いてきた人間を対象としたこの素晴らしい仕事を”勇気とやる気と愛情、さらに専門職としての誇り”をもって、引き継いで欲しいと結ばれた。

（文責/食物栄養学科・城田　知子）

滄桑の時代に生きて

―退職に当たって―

児童学科・幼児教育科
教　授　櫻　井　　至

旧中学校入学後の漢文壁頭の「光陰矢の如し」「少年老い易く学成り難し」をしみじみ感じる年齢になった。昭和初期に物心のつく頃には、周囲が何か貧しい中で、大演習で兵隊が各戸に民宿するなど軍国的な雰囲気を感じていたが、中学生になると、遂に日中戦争から第二次大戦へと戦いが拡大した。

こんな事から始めたのも、各世代が多感なる青年期にそれ独特の経験を経るのは当然としても、今世紀に入って大正・昭和にかけての有偽転変を経た世代は珍らしいからである。祖父母の生活は江戸生れの風俗習慣が色濃く残っていた。ようやく近代化を強める時期に、大戦に突入、当然の敗戦後は、欧米民主主義・国際化の大波に草木もなびく現状となる。

大学では設置基準の大綱化による改変が進められ、本学でも一般教養科が解体される側の一員として、諸点で尽くし難い苦しみを味わったが、大学大衆化の度が強まるなか、再び教養教育の大事さが模索され始めたように思われる。授業中、時に応じて戦前・戦中・戦後について話が及ぶ時、学生の眼が輝きを増し耳をそば立て聞いているのは、何かを知りたいと求める表われであると思う。

戦前には修養主義が国民のモラルを形成してきたが、戦後の精神的混迷から、偽宗教は別として、若人の中に、拝金の趨勢にもかかわらず、心を癒す精神的なものを求める動きが強まってきたように思われる。軍国強化による国民の貧困時代から物のあり余る程の現在の経済成長時代の浮き沈みを経て、二十一世紀は何処へと向かうのであろうか。

学生の皆さん、近視的に目の前だけにとらわれず、物事を広く見る目を養うように努めて下さい。

最後にあたり、学生の皆さん、二代にわたる理事長、教職員の皆さまのご健勝を、そして本学の更なる発展をお祈り致します。

(Voice)

セミナーハウスに夢を求めて

セミナーハウス
豆田　正秀

風光明媚な北山湖を見下ろす大自然の中に、中村学園セミナーハウスがオープンしてから、早いもので四年目を迎えた。用務員として勤めている私が感じたことを申しあげ、今後の有意義な活用法の一助になれば幸いである。

今までの利用状況を見る限りこの豊かな自然を生かして、自然とのふれあい体験学習をきれた方が何人ぐらいおられたであろうか・・。皆無とはいわないまでも、ごくわずかであったろう。特に、学生さんに申しあげたいことであるが、自然と向きあい、自然との対話をしてほしいと思っている。限られた日時での宿泊研修であり、時間的な制約もあるとは思うが、その中のわずかな時間でもよいから自然に目を向けて、植物との対話を楽しむくらいのゆとりを持ってほしいと思う。

ところで、かく言う私も、自然に目を向け、植物に興味を持つようになったのは最近のことである。私はセミナーハウスに勤める前の数年間、県民の森で働いていた。森林学習展示館に見学に見えたお客様から植物についての質問を受けることがあったが、植物についてはまったく素人の私は、その都度、答えに窮していた。必要にせまられた私は、植物の標本作りに精を出し、図鑑を見るようになった。

手掛けてみれば面白いもので、植物学者であられた昭和天皇が、「雑草という草はありません。すべての草に名前があるのです」と言われたそうであるが、調べてみればそれぞれに名前があり、季節が来れば可憐な花が咲き、蜜を出す。甘い蜜を求めて蜂が群がる。その蜂によって花粉は媒介され、花は実となり子孫を残す。実に素晴らしい生態系である。こうした豊かな自然の中で生まれ育ちながら、つい最近まで自然に目を向けることがなかったというのは、私の周囲をはじめとして、小・中学校においても、自然に目を向けさせてくれる人が居なかったからである。

現在、中村学園で学んでおられる学生さんの中には、教職（保母も含む）を志望されている方もおられるであろう。やがて、子どもたちを教育する職に就かれた時、子どもたちが自に対して興味を持つような教育をしてほしいと思う。たとえ教職の道へ進まれなくとも、やがて結婚をされ、人の子の親となられた時、子どもたちの目を自然に向けさせてやれるのは貴方である。そのためにも、貴方が今、自然と向き合ってみてはいかがだろうか。長く厳しい冬が過ぎれば、山里にも遅い春が来る。山野には豊富な野草が芽をふく。柔らかい若葉を摘んで山菜料理に舌鼓を打つのも楽しみであり、静かなブームを呼んでいる。山菜料理を楽しむためには、まず自然に目を向け親むことが第一の条件である。

し植物に興味をお持ちの学生んがおられたなら、及ばずながら手助けをしたいと思っている。

やがては、このセミナーハウスが特色ある施設として、有意義に活用されることを夢みて職務に精励してゆきたい。

「教育と研究」の発行について

編集委員長（大学）　山藤　圭子

ひと頃、スクラップアンドビルドが企業で盛んに行われた。「少々の手直しでは間に合わない。エーイ作り直せ」ということであろう。物を作る工場ではこれもよいが、人が人を育てる大学では、近目遠目で己の姿を眺めて見て、それなりに姿をよくするにはどうすればよいか、思案するくらいがせいぜいであろう。

日本の高等教育は効果を上げていない。これでは世界に遅れをとる。これが文部省の焦りであり、また個々の大学の悩みである。私学にとってはPL法時代の死活問題でもある。

本学では、理事長の炯眼により、教育のための委員会活動が早くから推進され、一九七五年に「学力向上委員会報告書」、八十三年に「学生教育指導特別委員会報告書」が出て、それぞれの時期の教育に警鐘を鳴らして来た。九十三年には、現学長を委員長とする教育改善委員会が、全学的取り組みで、教育目標の成文化とカリキュラムの再編成を行った。更に九十五年には、自己点検・評価委員会が、本学の教育と研究の現状を点検し報告を行い、その報告をもとにして編集した大学、短大それぞれの「教育と研究」が一九九六年一月に上梓されるに至った。これは、本学の努力の跡を読み取って頂ける貴重な資料となると確信する。

筆者に突然大学の部の編集命令が下り、不得手な仕事と自覚しながらも、大学創立以来の思い入れもあって、本気で関わってしまった。その故に、あつかましくも加筆などしてしまったことを改めてお詫び申し上げる。

いずれは、基準協会のアクレディテーションを受けなくてはならないであろうが、個人個人の研究と教育への努力（ファカルティーディベロップメント）もさることながら、確固たる大学の組織の構築がどうしても必要であろう。評価に耐え得る大学を産み出す痛みを覚悟しなければならない。という編者の感想を付記させて頂く。

平成七年度 後援会地区連絡会

―本学を含め八都市で開催―

平成七年度の後援会地区連絡会が左記のとおり開催され、学園の教育・研究の近況報告とともに、学生の履修面・生活面・就職状況に関する全般的な報告と説明及び個別懇談が行われた。連絡会は、より良い教育効果をあげるためには、大学と学生、及び保護者が互いに連携をとり協力しあうことが必要であること、また保護者からの意見も本学の教育研究に出来るだけ反映していきたいとの考えから開催されている。

記

二月二四日　北九州　KMMビル
二月二四日　宮崎　宮交エアライン
二月二五日　長崎　ホテルニュー長崎
二月二五日　鹿児島　ステーションホテル ニューカゴシマ
三月　二日　福岡　本学
三月　三日　佐賀　若楠会館
三月　三日　熊本　チサンホテル熊本
三月　九日　大分　つるみ荘

（一冊の本）

「授業に関する学生の意見調査」を実施

授業に関する学生の率直な意見を聞き、授業の改善に役立てるための、「授業に関する学生の意見調査」を一月に実施した。この調査は、授業を定期的に吟味するための資料として、教員と学生間のコミュニケーションの一形態として位置づけられ、その結果の分析が本学における授業の改善と教育の質の向上へとつながる貴重な道標となることが期待される。

（文責）教務部長・島内　博行

人生に必要な荷物 いらない荷物

食物栄養学科
食物栄養科助手　松隈　美紀

人生の午後に差しかかったディック（48歳）、デイブ（38歳）という二人が、自分の人生に疑問を持ち自分はどんな人間なのか、なぜそういう人間になったのかを問いかけ、自分がもっている物や成し遂げてきたものを振り返る。「さて、ここからどこへ行こうか」と自分自身を見つめ直し、内なる自分の声に耳を傾ける旅に出る。

そこで、人生に必要な荷物、いらない荷物を詰め直すいくつかのパターンを見いだし、人間は「今日のために情熱をもち、明日のために目的をもって生きる」ことにより、人生に必要な荷物、いらない荷物を詰め直すことができるというところにたどり着く。

この本を読んで思ったことは、確かに今のこの紛らわしい世の中で、自分自身を保ちながら生きていくことは、とても難しいことだということです。しかし、ディックとデイブがたどり着いた「今日のために情熱をもち、明日のために目的をもって生きる」という言葉に集約されるように、人間は与えられた場所において、いかに情熱をもち、目的をもって仕事をし、人を愛し、自分らしく生きていくかということの大切さを感じました。

感じたり思ったりすることは簡単なことですが、それを実行に移すことは、とても難しいことではないでしょうか。しかし、人生を全うするからには、その努力をしなければならないと思います。

平成7年　4月
4日　入学式（大学生四百三名、短大生九百三十八名、計千三百四十一名が入学）
5日　新入生オリエンテーション
6日　大学院入学式（六名入学）
7日　大学・短大講義開始
10日　大学院講義開始
17日　新入生宿泊研修（～22日）

5月
12日　学園創立記念式典
17日　学園創立記念日
20日　リーダー研修（～21日）
29日　高等学校教育実習（～6月10日、大学食専4年）

6月
12日　学校給食・事業所実習（～17日、大学食専・管専3年）
12日　施設実習（～21日、大学児専4年）
12日　附属幼稚園実習（～26日、大学児専3年）
12日　幼稚園実習（～26日、短大幼教2年）

7月
1日　就職求人票公開
13日　前期講義終了
20日　前期試験開始（～8月4日）
31日　本学主催進学説明会

8月
4日　「英語・文化海外研修」出発（～30日、大学16名、短大24名参加）
5日　キャンパス公開
5日　施設実習（～9月13日、短大幼教2年）

9月
1日　保育所実習（～12日、大学児専3年）
2日　公開講座（～9月30日）
4日　情報処理センター夏期講習会（～14日）
4日　病院給食・事業所実習（～8日、短大食物2年）
12日　大学院第一次入試
21日　後期講義開始
25日　小学校教育実習（～10月23日大学児教3年）
30日　アジア栄養科学ワークショップ
30日　リーダー研修（～10月1日）

10月
2日　附属幼稚園実習（～17日、大学児教4年）
2日　幼稚園実習（～17日、大学児専4年、短大幼教2年）

キャンパスこの1年の動き

2日　保育所実習10月（～13日、大学児専3年）
2日　施設実習（～11日、大学児専3年）
11日　保健所実習（～17日、大学管専4年）

11月
3日　第29回霜月祭（～5日）
21日　大学推薦入学選考・短大家政科指定校推薦入学選考
22日　短大推薦入学選考

12月
2日　大学推薦入学選考・短大家政科指定校推薦入学選考・短大推薦入学選考合格発表
2日　リーダー研修（～3日）
22日　講義終了

平成8年　1月
8日　講義開始
8日　食物栄養学科・食物栄養科学術講演会
12日　後期講義終了
19日　後期試験開始（～30日）

2月
1日　大学試験入学選考
2日　短大試験入学選考（食物・幼教）
3日　短大試験入学選考（家政）
5日　保育所実習（～27日、短大幼教1年）
9日　児童学科講演会
12日　大学・短大試験入学選考合格発表
13日　大学管専卒業研究発表会
13日　大学児童学科卒業論文発表会（～14日）
14日　大学食専卒業研究発表会
21日　大学院修士論文発表会
24日　後援会地区連絡会開始（～3月9日）
26日　病院給食実習（～3月2日、大学食専・管専3年）
27日　大学院第二次入試

3月
22日　大学院終了式（十名修了）
大学・短大卒業式
（大学生三百四十名、短大生八百八十五名、計千二百二十五名卒業）
22日　謝恩会
（短大・食物栄養科・ホテルシーホーク）
（短大・幼児教育科・ソラリア西鉄ホテル）
（大学・食物栄養学科・ホテルニューオータニ博多）
（大学・児童学科・ホテルシーホーク）
（短大・家政科・西鉄グランドホテル）
23日

全国栄養士養成施設協会会長表彰・全国保母養成協議会会長表彰

栄養士、管理栄養士養成課程を優秀な成績で卒業する学生を、全国栄養士養成施設協会が毎年表彰しているが、今年も本学から三名の学生が会長表彰を受ける。

また、全国保母養成協議会も保母養成課程を優れた成績で卒業し保母になる学生を表彰しており、二名が会長表彰を受けることになった。表彰者は三月二十二日卒業式において、学長から表彰状を手渡される。

受賞者は次のとおり。

全国栄養士養成施設協会長表彰

△大学食物栄養専攻
池田　美和さん
（日清医療食品㈱　栄養士）

△大学管理栄養士専攻
佐藤　奈美さん
（九州管内国立病院　栄養士）

△短期大学食物栄養科
濱田　寿美さん
（福岡県職員（中級）学校栄養士）

全国保母養成協議会長表彰

△大学児童学専攻
高須　ひろ美さん
（ひかり保育園　保母）

△短期大学幼児教育科
竹内　薫さん
（みそら保育園　保母）

海外出張の記録

「氏名・職名①訪問国・期間②目的」

廣畑　富雄　教授
①アメリカ（H7・11／29～12／4）②アジアの食事に関する国際会議研究発表

新ヶ江　登美夫　講師
①シンガポール（H7・12／5～12／8）②コンピュータ教育に関する国際会議研究発表

鶴田　八郎　助教授
①イギリス（H7・12／9～12／18）②高等教育に関する研究協議会研究発表

権藤　與志夫　教授
①タイ（H7・12／26～H8・1／2）②アジア比較教育学会会員有志のタイ国教育視察

松尾　智則　講師
①タイ（H7・12／26～H8・1／2）②アジア比較教育学会会員有志のタイ国教育視察

廣畑　富雄　教授
①イタリア（H8・1／6～1／13）②ガンと栄養・食物に関するパネルミーティング

中村　元臣　教授
①アメリカ（ハワイ）（H8・2／5～2／10）②サラトガカンファレンス

松尾　智則　講師
①韓国（H8・2／21～2／23）②韓国文化研修引率

△大学児童学科　オペレッタ発表会から

●第23号●1996年3月22日発行●編集/中村学園大学・中村学園短期大学 企画広報室●〒814-01 福岡市城南区別府5-7-1●TEL(092)851-2531
FAX(092)841-7762